

●下總姥山に於ける石器時代遺跡

八幡一郎等著

東京帝國大學理學部人類學教室研究報告 第五編

本書は、松村睦博士の總説、八幡一郎氏の遺物・遺跡・遺跡、小金井良精博士の人骨に關する報告の三部からなつてゐる。

大正十五年に千葉縣下、姥山の石器時代住居址が発見されて以來、石器時代住居址の報ぜられるものに増加し、その研究は著しく進歩した。その紀念的な姥山の發掘報告をこゝに適當なる形式の下に發表せられた著者の數年に互る努力は大いに多としなければならぬ。唯、折角ながら誰にも淋しく思はれるのはその發掘の一半を擔當された宮坂光次氏の手記を見出し得ないことであらう。

堅穴住居址は都合十六、人骨は十五體分發掘された。そして八幡氏は日本全國に互る先史及び原史時代の堅穴住居址の比較から、時代が降るに従つて徑が大きくなり、淺くなる傾向があることを推論し、姥山の或る例がその古式の特徴を有することを指摘された。磨製石斧は断面圓形のものから、長方形に至る形式に限られ、打製石斧は各種の形式を含むも、未だ分銅形の整美なる域に達せず、土器から云へば所謂厚手式(勝坂式・阿玉臺式・加曾利E式)から所謂薄手式(堀之内及び加曾利B式)に至る時期を包含する。尤も薄手式土器は微量であつて、主として貝層上部にあり、本遺跡の主體をなす者は厚手式土器にある。

更に層位の一般的傾向から云ふと、加曾利E式は貝層中に多く阿玉臺式、勝坂式は貝層下の土層、堅穴直上にある。故にこの堅穴住居は勝坂・阿玉臺式の土器を使用してゐた時期に營まれたものであり、その後加曾利E式の土器を使用してゐた時期に貝層の大部分が堆積されたのであらうと云ふ。尤も著者は勝坂式以下の細別名稱を特に差控へて、第一群、第二群と云ふ稱呼を使用せられた。全體の論旨は隨る整然として、背筋に價すると思ふ。これは同時に、この論の背後にある關東を中心とした縄文土器の編年が漸くその歸結を得つゝあることを示すもので著者を始めてとして少からぬこの方面の研究家の多年の勞苦の結果に外ならない。併し乍ら、まだ綜合的な研究は發表されてゐないし、代表的な遺跡に就いても充分な報告がある譯ではないから、八幡氏報告の末節土器概観はあれだけでは多くの人々に理解し難い憾があるだらう。それはこの書以前に私的に豫定された概念で、一般の承認を經てもゐなければ、一般の承認を要求されたこともない概念をあまりにも使用したからである。例へば九つに細別した土器を三群に括めるのに就いて何等必然的な理由が説かれてゐない。暗に關東土器の一般的編年がこの線括を必然ならしめてゐるのではあらうが、かやうな重大な要點は是非取り立て詳しい説明を必要とするであらうと思ふ。文面から強ひ云ふなれば、「(一部の研究者の所謂勝坂式、阿玉臺式加曾利E式)と云ふ様な括弧内の附けたりりの文句に却つて重要なこれの説明の役割が擔はされてゐる様である。これでは聊

か負擔過重の嫌がある。先づ此等の何々式概念を確立するところが著者に要求せられるであらう。これは本書のよつて立つ基礎的概念である。またこれは小さいことであるかも知れないが私には意味の通じ難いところが同じく土器概観の劈頭にいまつある。即ち、この文(五八頁)によれば第五類土器は所謂阿玉臺式の第二群及び加曾利E式の第三群の兩方に入れられる様に解せられる。かう二つの別群に同時に包括せられることも何か特別の事由あつてのことと思ふが、それにはそれで何と説明の必要はあらう。第五類土器は第四類土器(これは第二群に屬する)と同類であるが局部的に著しく相違がある(四八頁)との説明や、第二群土器と第三群土器との間には間隔がある(五九頁)との語から見ると、第五類土器は第三群(加曾利E式)及び第二群(阿玉臺式)の双方に屬するとは解し難い。この小さい疑問もひいてはまた三群に綜括した土器分類の妥當性全般に互る疑問にもなると思ふ。要するに、若しかう云ふ疑問が私一個のものでないとすれば、本書が表面その論理の整然たる態様にも拘らず、少くとも言葉が少な過ぎると云ふ憾は多くの讀者に與へることと思ふ。

併し、吾々は一つの代表的な遺跡の報告が完備した形に於いて公表されたことを喜ばなければならない。記述が簡單で、よく了解出来ないのは、何か局外者の知り得ない事情があつたかも知れない。唯、私は一般に、石器時代の研究なり報告も一般の考古學者に、また考古學の問題も凡ての人々に理解される様

に書いてもらひたい。否、書きたいと云ふ希望を持つてゐる爲めに特に本書を説明の不充分の様に書きたてることになつたのかも知れない。この點は却つて著者に裕恕を請ひたいと思ふ。但し、なほ考へなほして見れば或は我が邦の考古學全體が説明を充分にして凡ての人々を納得さすまでにはまだ發達してゐないのであらうかを想ふのである。(四六倍版、七二頁、圖版二五 圖書院及丸善賣捌、定價參圓貳五)

●殷墟白色土器の研究

梅原末治著

東京文化學院京都研究所研究報告 第二冊

さきに東方文化學院東京研究所の『支那古器圖攷、兵器篇』の出版を見、いままたこゝに同じ學院京都研究所のこの報告の公表を見たことは實に前途の洋々たる支那考古學界に告ぐる曉の鐘の如くに思はれる。けた、ましく鳴り響く曉鐘に伴つて、その日の目覺しい行進が約束せられるかの如く感ずるのである。

更に著者、梅原末治氏が日本考古學界に残した足跡は寔に偉大なるものがあり、その業績の數々は誰もが熟知してゐるところであらう。然るに、著者は歐米留學を期として、深く支那の遺物に留意し、茲來研々として今日に及んだ。その成果が一日も早く世に現れんことは實に衆人の深く待望するところであつた。本書はその期待された最初の勞作である。著者が果して支那の考古學に對し何を求め、また如何に進まうとするかはよろしく本書に就いて窺はなければならないであらう。

先づ何よりも最初の題目として殷墟の白色土器が選ばれたと云ふところに、既にその抱負の一端を知ることが出来る。敢へて資料の少きを憂としなない、むしろ出土地の明確なるもの無きを歎じてゐる支那考古學界の現狀に於いて、その基礎的な作業を始めるのである。従つて多少とも出土地の限定された殷墟出土品を最初の題目に選んだことは實に動かない基礎工作を行はんとする著者の強い要求を表白してゐると思ふ。このことは次ぎに出土地の略々確實な陝西省鳳雛縣出土の銅器群の研究が準備されつゝあるのを思へば一層明白である。

兎に角、世界中に散在して所藏されてゐる殷墟出土の白色土器を悉く蒐め、その小破片を接合按配して原形の復原に努め從來全く豫期せられなかつた豆とか壺とかの器形を眼のあたりに顯示したのである。殊に瑞典の首都ストックホルムにある一破片と東京にある一破片、更に關東州金州にあつた二破片を互に接合するが如き饒當は正に著者の獨壇場である。その努力と注意力には今さらながら敬服の外はない。かくて殷墟出土と稱する白色土器の全貌を本書一卷によつて窺ふことを得せしめる。論ずるものは來り論ぜよ考へるものはついて考へよ、論考の資は蒐めてこの一卷にありと云ふのが著者の立場である。この點はあの尅大な銅鐸編以來の一貫した精神である。

著者は飽くまで資料學 Quellenkunde を主張する。それ以上のは措いて他人に俟たうと云ふ。併し乍ら、本書に於いて白色土器に關する必要な考察が關けてゐる譯ではない。例へば

白色土器文様を野蠻文様 savage ornament と斷じ、太平洋を繞る諸未開民族の文様と連關することを説き、「許される推測」として此等圖文の木彫起原を認め、殷周銅器との一致から古銅器盛行期の所産、更に局限すれば殷墟出土の雕骨類と同時代なりと斷じ、シレン氏の銅器原型説を廢し、彩文土器・黑漆器色土器の如く古代に於ける高級土器の一種と見做し、その存在を許す様な奢侈階級の成立を推論し、更に殷墟遺跡を石金過渡期のものとする通説に疑問を投じ、より進んだ文化段階を示現するを想ふが如きである。(第貳二倍半、七九頁圖版四一、靈文堂及丸善發賣、七圓半)

◎考古圖篇 第六輯

東京帝國大學文學部考古學研究室編

本輯は同所蒐集品のうち、アメリカ關係の遺物を圖版三〇葉に收め、簡單な解説を附したものである。原田淑人氏の自序に「アメリカ・インディアンの原住地がアジア大陸に在ると推想されることから、米國並に我國一部の學者は彼等と我國石器時代住民との關係に就いて注意するに至つたのである。……近時アジア大陸並に太平洋の考古學的研究が著しく進歩したに拘らず、アメリカ大陸のそれに對しては殆んど無關心の如き觀がある。蓋し、我國では後者の遺物に親しく接觸する機會に乏しく、隨つて興味を生じない爲めに外ならないのである。」とあるは不幸ながら正しく我國のアメリカ考古學に對する現狀なので

ある。このアメリカの考古學的蒐集品なり、この圖録が我が國のかうした闕陥を補ふに役立つものがあることは編者と共に私の深く信するところである。(東京・美術工藝會發行、價貳圓半)

●The George Eumorfopoulos Collection: Catalogue of Chinese and Corean Bronzes, Sculpture, Jades, Jewellery and Miscellaneous Objects, Vol. III, Buddhist Sculpture. by Percival Yells.

(Pp. 93, Pls. 75,) London 1932.

ユーモルフォオプロス氏所藏の支那銅玉及び彫刻の圖録第三卷である。本冊には専ら佛教彫刻のみを収めてゐる。冒頭には唐までの圖像學 Iconography を中心とした歴史的敘述を序説とし、次ぎに各佛像の詳細な解説を附してゐる。圖版解説には銘文の對譯なども挿入され、かなりの努力が拂はれてゐることが窺はれる。記述は平明であり、判斷も頗る穩當である。唯個々の佛像の年代比定には從ひ難いものも少くない。就中、五代宋以後のものになると、時代の判定頗る瞬眛で全く年代觀の基準をもたない様に見える。併し、これはむしろ學界一般がこの方面の研究が不充分で、一定の考へに到達してゐないからに外ならぬ。編者一人を責めるには當らない、學界一般の負擔すべき責任である。却つて、漠然たる年代附けのまゝに新しい時代の資料がいくらかでも世の中に紹介されたのは編者の功績であらう。單に時代が新しいとか、作品が優れてゐないとかの理由

から五代宋以後の佛教彫刻を等閑に附することは許されないと思ふ。唯その爲めに本書の豪華な作りに相應しからぬ作品まで雜收されたことは本書體裁の爲めには惜まれることであらう。兎もあれ、名に負ふユ氏の蒐集品だけあつて、學界を益することは少くないであらう。例へば、雲崗式の菩薩像(9)、齊隋式の菩薩立像(21)、推定神龜三年の四面佛碑(11)、繁雜な莊嚴姿の菩薩立像(24)、河北省曲陽縣城南修德寺出土の釋迦等身立像(34)、磚浮彫三尊佛(35)、木彫菩薩像(82)、は作も優秀であり、研究の上にも充分注目に價するであらう。(以上水野)